

## 1 はじめに

### (1) 本市の概要

本市は京都府の最北端に位置し、山陰海岸ジオパークの一部でもある日本海と山に囲まれた豊かな自然環境に恵まれている。市内には6中学校あり、昨年度の生徒数は1442名と年々減少傾向にある。そんな中、平成26年度の峰山学園・網野学園を皮切りに、平成28年度からは市内全体で6学園による小中一貫教育が推進され、就学前から中学校卒業までの10年間の成長発達を見通した一貫性・系統性のあるカリキュラムに沿って教育を進めている。京丹後市学校保健主事会は、6中学校・17小学校で構成されており、ここでは中学校部会の取組について報告する。

### (2) 取組の経緯

本会では、「生徒の心身の豊かな発達を目指し、健康で安全な生活を営むたくましい実践力を育てる」ことをテーマに研究を進め、生徒自ら健康問題を解決する力を付ける健康教育について研究を重ねてきた。

平成29年度は、「主体的・対話的で、深い学び」を取り入れた健康教育について研究し、講師を招いた新学習指導要領の改訂ポイントの研修や各校で実施している健康教育について交流した。その中で、講義型ではなく発見学習・体験学習・調査学習・グループディスカッション・ディベート・グループワーク等、手法を工夫することが効果的であることを学んだ。

これを踏まえて、平成30年度は2年生の保健体育「心肺蘇生法」の授業が、生徒たちの実生活でより実践的なものにできないかと検討した。その結果、外部講師を招いて行った「心肺蘇生法講習」を受けて、「救命救急シミュレーション」を交えた授業を実施する方向で研究を進めることにした。

## 2 研究実践の概要

### (1) 関係機関と連携した実践

保健主事会では、「京丹後市職員まちづくり出前講座」を活用し、市立病院の医師・看護師、消防士等を講師に招き、「心肺蘇生法講習会」を実施し、胸骨圧迫やAEDの使い方等について実習した。

この実習は知識として第一次救命処置の方法を知る上では有効であったが、更に実践的な知識を高める為に生徒自身が考え、仲間と協力し主体的な行動につながる学習の必要性を感じた。

### (2) 「救命救急シミュレーション」の授業研究

#### ① 指導案作成

##### ア 目標

- ・「心肺蘇生法講習会」で実習した心肺蘇生法の知識と技術を実際の場面で救命行動に生かせるようにする。
- ・仲間と協力しシミュレーションすることで、実際の場面で行動できる自信を付ける。

##### イ 指導の流れ

- ・前時に行った「心肺蘇生法講習会」の復習と確認
- ・本時のめあての確認
- ・場面を想定し、自分たちにできる救命処置の考察
- ・心肺蘇生の手順の確認
- ・救命シミュレーションの実習
- ・本時の学習のまとめ

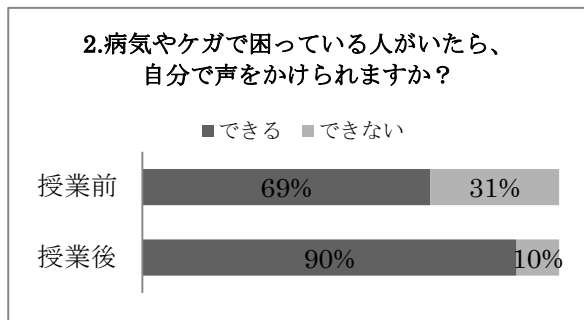
#### ② ワークシートの作成

授業で使用するワークシートを作成した。

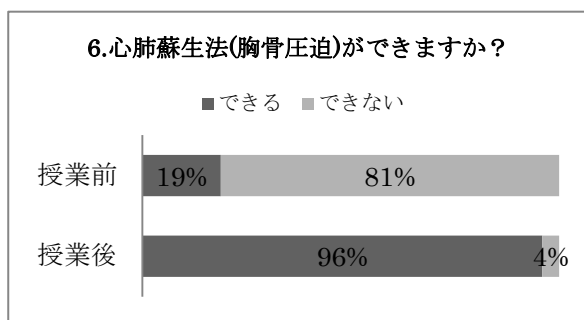
#### ③ アンケート（事前・事後）の作成・実施

心肺蘇生法の理解度、心理変化を比較するために、市内6中学校2年生438人に対してアンケート調査を実施した。アンケート調査は授業前と授業後の2回実施した。

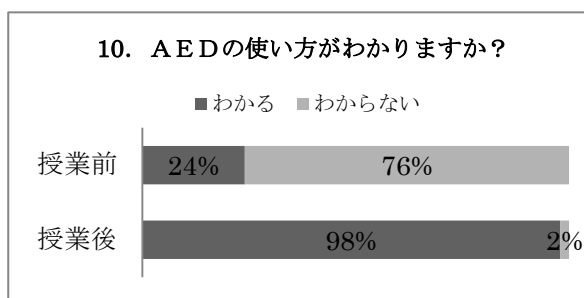
<事前・事後のアンケート結果から>



「病気やケガで困っている人がいたら、自分で声をかけられますか？」の問いに「できる」と回答した生徒は、授業前は 301 人(69%)であったのに対して、授業後は 377 人(90%)になり、21%増加した。



「心肺蘇生法(胸骨圧迫)ができますか？」の問いに「できる」と回答した生徒は、授業前は 82 人(19%)であったのに対して、授業後は 403 人(96%)になり、77%増加した。



「AEDの使い方がわかりますか？」の問いに「わかる」と回答した生徒は、授業前は 105 人(24%)であったのに対して、授業後は 411 人(98%)になり、74%増加した。

(アンケート結果一部抜粋)

アンケートでは、「病気やケガで困っている人がいたら自分で声をかけられますか」や「病気やケガで困っている人がいたら、周りの人と協力して助ける手伝いができますか」という質問に「できる」と回答した生徒が多かったが、感想には、「本当にその現場に居合わせるとでき

るかどうか自信がない」と書いている生徒もいた。

#### ④ パワーポイントの作成

授業の中で、心肺蘇生の手順が確認できるようパワーポイントを作成した。

#### (3) 模擬授業の実施 (H30. 11. 13)

作成した指導案に沿って、ワークシート・パワーポイントを使用し、模擬授業を実施した。実施後、中学生が実際どの程度動けるのかを考え、シミュレーションの役割等を再検討した。



#### (4) 公開授業の実施 (H31. 2. 7)

京丹後市立弥栄中学校で、授業を公開し市内の保健主事が参観した。



授業では、「前回学習した心肺蘇生法の知識と技術を実際の場面で救命行動に生かせるようにする」という目標で、保健体育科教師がパワーポイントを活用して授業を行った。

その後、実際の場面を想定し、シミュレーションを行うため、班で話し合いをした後、実習を行った。

実習の中では「仲間と協力しシミュレーションすることで、実際の場面で行動できる自信を付ける」ことを目標とし、実際に人が倒れた場面を想定し、シミュレーション班 (1.2 班) と観察班 (3.4 班) に分かれて役割分担を決め、動きの確認をしながら実習を進めた。

シミュレーション班では、第一発見者、応援者 (119 番通報、AED、胸骨圧迫) を決め実際に

行動した。観察班はチェックシートをもとにシミュレーション班の行動を観察した。最後に、役割を体験したり、観察したりして気付いたことを各自でふり返り、全体で交流した。

#### (5) 各校での実践

久美浜中学校では、「京丹後市職員まちづくり出前講座」を活用し、久美浜病院ライフサポートチームと京丹後市消防本部の方々12名にお世話になり、救急救命講習会を実施した。授業内容は、以下のとおりである。

- ① 1時間目は瀬尾医師の講義を受け、病院や消防署の方々のデモを見せてもらい、実習に入った。呼吸吹き込みは見本のみであった。
- ② 2時間目は、2つのテーマをもとに実習とシミュレーションを行った。

- ・ 1つ目は、「効果的な心肺蘇生を実践するために」というテーマで、1分間にA班は150、B班は110、C班は80のテンポでポンプを押し、2リットルのペットボトルを比べる実験をした。その後、どのような胸骨圧迫が有効か、絶え間ない有効な胸骨圧迫のためにできることを班ごとにディスカッションした。



- ・ 2つ目は、「勇気を持って行動するために」というテーマで瀬尾医師から「使われなかったAED」の話を紹介してもらった。実習をしている教室で人が倒れたことを想定し、各班AEDを取りに行く人、職員室に応援を呼びに行く人を決め、実際に行動し、かかった時間を計測した。その後、「自分たちにできること」をテーマに班ごとのディスカッションを行った。



### 3 本授業研究における成果と課題

#### (1) 成果

- ・ シミュレーションを取り入れた授業を実施したことで、講習会で得た知識が実生活での実践につながりやすくなった。
- ・ 相互評価等を取り入れながら手順を確認することにより、心肺蘇生法についてより確実な理解を深めることにつながった。
- ・ 中学生でも知識と技術と人を助けたい気持ちがあれば救える命があることに気付けた。
- ・ 困っている人がいたら声をかけ、そして心肺蘇生を行う意識が向上した。
- ・ 市内の中学校で連携して授業研究をしたことで、前年度まで各校で実施していた授業内容が更に充実した。

#### (2) 課題

- ・ 授業の実施を継続していくためには、各校の実態に合わせて授業内容を検討する必要がある。
- ・ 保健主事としては、これを機会に教職員の校内緊急対応の体制についても見直す必要がある。

### 4 今後の方向性

健康教育を進める上では、授業で学習した知識を知識だけで終わらせず実生活でより実践的なものにすることが重要である。今回の授業研究を通し、講義型だけの授業でなく体験学習、グループワーク等の手法を工夫することが効果的であることを実感した。

このことを踏まえ、保健主事として、心肺蘇生法の授業だけでなく、様々な内容でも取り入れられるよう校内に発信をしていく。また、今後も京丹後市学校保健主事会として、各小・中学校との連携を深め、取組や研究を重ねながら、就学前から中学校卒業までの児童・生徒の健康教育を更に推進していきたい。